

福島の 児童文学者17

『石川雅章』

石川雅章(いしかわがしろう 本名政芳)は、明治三十一年七月十二日、現在の福島県喜多方市に生まれていく。口演童話家・作家・ジャーナリストの顔を持ち、マルチ・パフォーナマーと言われるほどの幅広い活動をしてきたというが、どの様な人物であったのだろうか。

浄土宗光徳寺住職宇佐美法禪の孫だった石川は、四歳の頃から入田付(いりたづき 現喜多方市)にあった同寺で、祖父父母から「お話」を聞きながら幼少時代を過ごし、少年になると、雑誌や本に夢中になり、雑誌『日本少年』『少年世界』『文章世界』等に投稿し毎号当選する程の文学好きとなっていた。

〔石川と福島〕

喜多方尋常高等小学校を卒業した翌々年、石川は福島市に移り、「やまと新聞」福島支局の記者となっている。

また、その頃には、童話作家となることの意味は固っていたといわれる。それを表わすかのように彼は、大正六年四月に童話雑誌『足跡』を創刊。こ

の中で「つばめとカナリア」「父を訪ねて」「眞の幸福者」(「知らねばこそ」と改題、掲載)を書いている。

「眞の幸福者」は、石川の主張を具体化した象徴童話の試作で、児童文学者の鈴木三重吉より「失礼ながら御表現があまりに説明的で、くどいと思います。形容が多いのです。もつと簡朴にお書きになったらどうかと思います。……」との批評を受けた作品でもある。

「父を訪ねて」は、石川自身の生い立ちを書いた小説で、自分がかくし子であり、父親は県の要職にあるとした内容は、世間を騒がせるには充分であり結果的に、福島を離れる原因となった。

〔石川とお伽くらぶ〕

福島から「いはらき新聞」土浦に移った石川は、大正九年九月「土浦お伽くらぶ」を元土浦小学校長・清水恒太郎と創設している。

「お伽倶楽部」とは、明治時代に設立された団体で、雑誌『お伽倶楽部』創刊号によると、「学校と家庭との間にたちて子供の為に社会教育の機関となり、お伽講演会、音楽会、お伽芝居などを催し、兼て良き娯楽の場所を備えん事を目的に」となっている。顧問に巖谷小波、久留島武彦が主幹となり活動。明治三十九年三月十七日東京の神田青年会館で、第一回「お伽講話会」を開いたのを皮切りに、種々の催しを全国で行い、以後残地に「お伽倶楽部」が誕生していった。

「土浦お伽くらぶ」もその一つで、お伽劇の上演なども行い、子どもたちや父兄からも支持を受けた。ところが、翌年迫害により続行不可能となり、石川自身も上京、時事新報社に移ることとなった。

しかし、大正十一年七月に復活の会を小野座という劇場で行い、余興に、松旭斎天優一座の魔奇術と歌劇「羊の天下」を上演している。

〔作家としての雅章・星影〕

石川は二つのペンネーム(雅章、星影)を持つ作家であった。

雅章(がしろう)の名前で書かれている本は、『松旭斎天勝』(桃源社・昭和四十三年)等、奇術心霊術に関するものが多い。子ども時代にお寺で暮らした事が、心霊・妖怪研究へのきっかけとなつていようだ。また、「土浦お伽くらぶ」復活時に知り合った「松旭斎一座」との関わりが奇術への関心となり、ついには、文芸部長として「松旭斎一座」に入座、構成・演出から宣伝部門まで担当している。

星影(せいえい)の名前は、児童関係に使われ、雑誌『足跡』や『童話研究』などの執筆、雑誌『少年』『少女』等への投稿に使われた。

〔星影と童話研究〕

彼の童話についての思いは、次の文章に見る事ができる。
夢の国——即ちこどもの世界である。こどもは夢の国に住む。否、現

の世と夢の国を往復するのがこどもである、と云つた方がもつと適切であろうと遠く離れた人々、また既に幽明界を異にした人々が逢うて手をとるのは夢の国である。そしてそれが不思議でも無い。——と同様に、鳥でも獣でも、草や花や、虫までも普通の人々に交つて語り合う、ということが、童謡の世界では極めて自然であつて何等奇異を起さしめない。美しく、楽しい夢の国。——その夢の国から生れ、また童話から夢の国へ旅をする。〔雑誌『童話研究』第二巻第一号より〕

石川は「おとぎばなし」の中に「夢の国への通い路」を求めていたが、当時は、楽しい夢の国から理屈っぽい現実引き戻す「科学おとぎばなし」「教訓おとぎばなし」が流行していた時代であつた。これらの「おとぎばなし」についても認めてはいたが、理想の「夢の国」を求めため、日本に於ける最初の童話研究雑誌『足跡』を創刊した。鈴木三重吉が『赤い鳥』を出版する約一年前のことである。

童話研究雑誌『足跡』を見れないのが残念だが、日本で最初の童話研究雑誌が福島の地で、生まれてきた事を知つてほしい。

※参考文献

『日本児童文学事典』(大日本図書)
『忘れ得ぬ人間像』(菊地芳男・著)
雑誌『童話研究』(久山社)